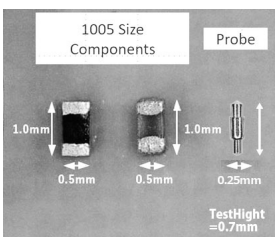


# プローブ応用製品が好調

## 同軸ケーブル代替などで実績

高い技術力を武器に、評価・開発用ソケットを軸に存在感を発揮する国内有数のソケットメーカー。主力の半導体用ソケットに加え、近年はプローブを用いたユニット・モジュール製品などの「プローブ応用製品」



提案を強化している極短プローブ

品」と呼ぶ領域での事業展開にも力を入れている。

2023年6月期売上高は前期比横ばいで推移したものの、24年6月期は市況低迷の影響を受けて、減収を想定する。ただ、23年秋口を底に回復基調にあるとされており、来期（25年6月期）は売上回復を見込む。

業績回復および拡大を担っているのが、プローブ応用製品だ。その一つである測定器分野では、すでに顧客とのあいだで具体的な案件が進行中で、収益貢献も始まっている。高速メモリなどの検査・測定では従

来、同軸ケーブルが担うケースが多かったが、高周波

の進展に伴い、これをプローブに置き換える動きが出てきている。同社ではこうしたニーズに対応すべく、極短プローブの提案を強化。計測／通信分野では高いGHzレベルでの伝送路接続が重要で、整合されたインピーダンス特性では

低背プローブ接続が求められている。同社のプローブは0.7mmの接続長で、0.4mmピッチ、60GHzを超える伝送特性を実現する。また、量子コンピュータ向けでも新たな取り組み

が進んでおり、一部業績貢献が始まっているという。

量子コンピューティングは極低温環境での動作が求められるなど、ICソケットに求められる要求も非常に特異かつ高度なものであり、同社の技術力を活かせる分野であるという。

同社では、17年4月にプローブ製造および切削加工を手がける九戸精密(株)（岩手県九戸郡）を子会社化。プローブ製造からの一貫した事業体制を確立し、業容を拡大させている。九戸精密は主要顧客からの需要増を受けて、150万ピン／

週の生産体制を構築。足元ではデータセンター投資の低迷を受けて、事業低迷を余儀なくされているが、主要顧客からの受注回復に加え、顧客カバレッジの拡充も今後進むとみており、期待を寄せる。プローブ単体の加工は現状まだ低い水準にあるが、先述のプローブ応用製品向けはフル操業が求められている。

市場の端境期にあたる期間を活用して、九戸精密ではシズンファインデバイス時代から培ってきた精密加工技術と、自前でのエンジニアリング能力を駆使して、一部設備の内製化にも取り組んでいる。その一環として、自動組立装置の運用を23年から開始。TAT短縮につながっており、需要回復期に備えた体制づくりも鋭意進めている。

